



研究者名※	塩崎 尚美 SHIOZAKI NAOMI	学位※	家政学修士(お茶の水女子大学)
所属※	人間社会学部 心理学科	職名※	教授
連絡先	shiozaki@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read-19630514		
研究分野※	臨床心理学、教育心理学		
研究キーワード※	乳幼児精神保健、子育て支援、親子関係		
共同研究・競争的資金等の研究課題	母親の分離不安の変化過程とその支援(科学研究費・萌芽研究・研究代表者 2004-2006年) 両親の抑うつと幼児の適応に関する検討(科学研究費・基盤C・研究分担者 2013-2016年) 両親の抑うつと小学校低学年の適応に関する研究(科学研究費・基盤C・研究分担者 2016-2018年) 両親の抑うつおよび養育行動と10歳児の行動特徴との関係(科学研究費・基盤C・研究分担者 2019-2023年)		
社会貢献・産学官連携活動等	社会福祉法人つくしんぼの会評議委員(2018年～) 明治安田こころの健康財団 You Tube講座「子育てを楽しむために」2021年2月～3月 川越市・伊勢原市 2021年11月 羽村市 明治安田こころの健康財団 子ども・専門講座2(ビデオ講座)「保育者と心理専門職との協働を考える」2021年5月 文京区子ども家庭支援センター 研修会「乳幼児と親への支援:乳幼児精神保健の観点から」2021年9月8日 姫路市教育委員会主催 園長研修「子供の变化への関わりについて」2021年12月10日		
受賞歴			

研究領域	臨床心理学・教育心理学・親子関係	(SDGs)
研究テーマ※	4, 5歳児の親子相互作用と家族コミュニケーション	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	<p>【研究の背景・目的・内容】</p> <p>従来、幼児期後半である4, 5歳の時期の人間関係は、親から友人へと移行するといわれてきたが、習い事の影響などにより、幼児期の対人関係の経験は、家庭での経験の比重が大きくなっており、4, 5歳児の親子相互作用を検討することは重要であると考えられる。</p> <p>そこで4, 5歳児の親子相互作用と家族コミュニケーションの観察を行い、その特徴を明らかにすることを試みた。特にどのような親子相互作用の中で、子どもの主体性が育つのかを探るために、子どもの主体性に注目した分析を行った。観察を行ったのは、母子、父子の自由遊び場面、片付け場面、家族で「休日」に何をして過ごすのか」についての話し合う場面である。</p> <p>その結果、親子・家族の関わりが<応答・柔軟性>群と<侵入性・批判・敵意>群とに分類できること、<侵入性・批判・敵意>群は<応答・柔軟性>群に比べて、母親の抑うつ傾向、育児負担感が高いこと、父親が子どもの行動の問題を認識していることが明らかになった。</p> <p>【応用例、研究の展望】</p> <p>この研究結果を受けて、母親の育児負担感を軽減できるような子育て支援グループや、父親に子どもの発達段階に応じた行動の理解や関わり方を助言する活動に意義があることが示唆された。今後は、この知見を活かした子育て支援グループを企画し、その効果研究を行っていきたいと考えている。</p> <p>【研究方法の特色】</p> <p>親子コミュニケーション、家族コミュニケーションの評定尺度を作成(4, 5歳児用、10~11歳児用)</p>	
本研究関連特許・論文等	<p>・塩崎尚美・安藤智子・福丸由佳・無藤隆(2016)「4, 5歳児の母子、父子遊び場面と父母子の課題解決場面の検討Ⅰ-子どもの行動傾向、親抑うつ、夫婦関係との関連-」『発達心理学会発表論文集』2016</p> <p>・塩崎尚美(2019)4, 5歳児の親子相互作用と家族コミュニケーション-子どもの主体性との関連から-「日本女子大学総合研究所紀要</p>	
共同研究・外部機関との連携への期待	各区の子ども家庭支援センター等と連携した子育て支援活動	